

「貴重な自然環境を未来へ」

中央アルプスのシカ対策シンポジウム開催

【南信署】中央アルプス地域では、平成25年度に標高2600[㍍]でニホンジカの侵入が確認され、生息域の拡大、生息数の増加による貴重な高山植物や固有生物への干渉、林床植生等の消失に伴う土砂流出・林地崩壊の発生など自然環境や生態系への影響が懸念されるほか、農林業被害の拡大等も心配されています。

このような中、当署が平成27年10月に開催した南信地区国有林野等所在市町村長有志協議会の総会において、中央アルプスの食害に対する協議会の設立が提案され、平成28年2月10日に中央アルプス野生動物対策協議会（上伊那地方の全八市町村、南信森林管理署、天竜川上流河川事務所、信州大学、長野県）が発足しました。

本協議会は、中央アルプスにおけるニホンジカ被害の現状を広く皆さんに知っていただくとともに、今後の対策や情報共有・連携体制整備に繋げることを目的として、1月20日、「中央アルプスのシカ対策シンポジウム」を駒ヶ根市で開催しました。

当日は、自治体の関係者の他に農林業関係者、観光業者や市民等、約150名の参加があり、基調講演では国立研究開発法人森林総合研究所の小泉透ディレクターが「ニホンジカの生態と被害対策」と題して、ニホンジカ被害及び対策の歴史や、富士山麓で森林管理者・捕獲技術者・研究者が連携し取り組んだ、確実かつ効率的な捕獲を行うことで大幅に生息密度を低下させた取組の紹介がありました。



シンポジウム会場の様子

事例報告では信州大学竹田謙一准教授が、「南アルプスにおける食害対策について」と題して、南アルプス食害対策協議会が、高山植物保護のため激しい食害地で行う防鹿柵の設置活動に、ボランティアの力を活用している事例等を報告しました。南信森林管理署からは谷澤功志森林技術指導官が「中央アルプスにおける国有林の取組」と題し、センサーカメラやGPS発信器によるニホンジカの生息及び行動把握調査の結果、くくりワナによる職員捕獲の取組について報告しました。長野県からは佐藤繁ジビエ振興室長が「長野県における鳥獣保護管理の取組」と題し、長野県における獣害の歴史と現状、効果的な獣害対策は行政のみでなく地域の関係者の協力が必要と話されました。

最後に行われたパネルディスカッションでは、本協議会の杉本幸治会長（駒ヶ根市長）から多くの観光客や登山客が訪れ楽しんでいる豊かな自然環境を守っていくため、猟友会や関係機関が連携した捕獲チームを設立し、効率よく捕獲を進めたいと話されました。久保芳文南信森林管理署長は、南アルプスから流入するシカの防止対策を行うこと、南・中央両アルプス協議会が連携する連絡協議会設立の必要性を指摘しました。竹田准教授は、南アルプスの協議会のような課題を共有できるチームワークづくりの必要について話されました。

参加者からは「手遅れにならないよう早めの対策を行っていくことが重要」などの声が聞かれるとともに、新聞各紙に取り上げられ初期の目的が達成されたと感じています。

今後、本協議会は中央アルプス一帯の自然環境を関係市町村が一体となった保全に取り組むため、下伊那や木曾地域など周辺市町村へも参加を働きかけていく予定です。



パネルディスカッションの様子
（右から3番目が久保南信署長）